

「菊花の約」における義兄弟の関係

—原話「范巨卿鶏黍死生交」と比較—

曾 靖 芳*

1. はじめに

日本文学の中には中国文学から翻案した物語が数多くある。原作をそのまま翻訳した作品もあるが、原作の一部の設定を使い、改編した作品もよく見られる。江戸時代の上田秋成が書いた『雨月物語』は、中国小説の翻案による怪奇譚で、日本文学史上の名作として評価されている。今日に至っても多くの学者が研究している。『雨月物語』の「菊花の約」は中国白話小説『古今小説』の「范巨卿鶏黍死生交」を原作として改編された物語である。

「菊花の約」と原話「范巨卿鶏黍死生交」に、二人の主人公は兄弟の誓を誓い、義兄弟になった。どうして友人の関係ではなく、義兄弟になるのか。また、義兄弟の設定は文章の中で、どのような働きがあるのか。小論では、中国と日本の思想・文化などの相違を考慮し、多元的な視点から「菊花の約」と原話を比較し、中日両国における義兄弟の関係を探求してみたい。

2. 作者の時代と作品の背景

義兄弟というのは、血縁がない人が契り、兄弟のような関係を結び、一種の擬制家族的な関係になることである。中国文化における義兄弟の歴史は、何時から始まったのだろうか、その確実な時間にははっきりと分らないが、史書の記録で漢代まで遡ることができる。漢代の末期から、皇族から平民に至るまで、契りで家族になる習俗は盛ん

になった。中国文学にもそのような情景が多く見られる。その中で、最も有名なのは『三国演義』第一回にある「桃園の誓い」というシーンである。劉備・関羽・張飛三人が誓約を誓い、固い絆を持つ義兄弟となった。実際に中国の正史に「兄弟のように¹⁾」と書いてあるが、三人が契りによって義兄弟になったことは証明できない。しかし、三人が義兄弟になるという設定は、陰謀と戦乱が多い漢代の末期に、劉備・関羽・張飛の間の信頼を示している。『三国演義』を読んだ人は三人が義兄弟になる影響を受けた。当時の社会もその習俗が盛んとなり、更にその後の文学に大きな影響を与えたと思われる。

「范巨卿鶏黍死生交」は『後漢書』の「獨行列傳」の「范式伝」を借用している。しかし、『後漢書』から明馮夢龍『古今小説』にある「范巨卿鶏黍死生交」まで、また二つのテキストがある。中国東晋の干宝が著した志怪小説集である『搜神記』卷十一「山陽死友傳」、元曲《死生交范張雞黍》も同じ『後漢書』から改編された物語であるが、『後漢書』、「山陽死友傳」と《死生交范張雞黍》の范巨卿と張劭は共に太学に学習した仲が良い親友というだけであり、義兄弟の関係を結んだことはなかった。約束を守るために自殺する場面や、殉死の結末もなかった。明馮夢龍が『古今小説』を編集している際、「范式伝」二人の友情を背景として、新しい物語を書いたといえよう。元の物語を改編し、范巨卿と張劭は義兄弟に結ぶこととなったのである。このような変化があるのは、当時義兄弟を結ぶ風俗の影響を受けたのではないだろうか。

* 台湾大学 院生

日本における義兄弟の契りは何時から始まったか、確実にいえないが、武士の時代に入ると、義兄弟になることは盛んとなったことが分かる。「菊花の約」の背景は十五世紀の戦国の騒乱期である。その時、義兄弟の誓いを結んだことはよく知られている。例えば立花宗茂と小早川秀包、石田三成と直江兼続など、有名な武将がその例である。義兄弟となるのは、当時の日本社会の風習であったといえる。その慣習は上田秋成が生活した江戸時代に入っても続いてきた。上田秋成は義兄弟の設定を踏襲したのは、当時の風俗の影響を受けたと思われるが、原話の人物の設定をそのまま借用したら、日本の社会には合わなくなったから、物語を日本化するために、二人の主人公は中国の秀才と商人から、日本の儒者と武士に変えられた。原話と「菊花の約」は、義兄弟の関係に設定するのは社会背景と関係があることを推測する。

3. 義兄弟になる過程の相違

「范巨卿鷄黍死生交」と「菊花の約」二作はどちらも病人を看護することより、義兄弟の契りを結んだという結果に発展した。原話に、張劭はある日、店に宿をとる時、隣の部屋から人の声が聞こえた。店の小二から、一人の秀才が病に倒れたことと分かった。小二の警告を無視し、病人である范式を看護することにした。そのため試験の時間を逃してしまった。次は范式と張劭が兄弟に結ぶ場面の描写である。

比及范巨卿將息得無事了，誤了試期。范曰：「今因式病，有誤足下功名，甚不自安。」劭曰：「大丈夫以義氣為重，功名富賈，乃微末耳，已有分定。何誤之有？」范式自此與張劭情如骨肉，結為兄弟。式年長五歲，張劭拜范式為兄。²

自分のせいで、張劭が試験を受けられなくなったことで、范式は張劭にやましい気持ちを持った。

しかし、張劭は「大丈夫以義氣為重，功名富賈，乃微末耳，已有分定。何誤之有？」と慰めた。その後二人は義兄弟に結んだ。次は「菊花の約」で、原話のこの場面に対応する部分である。

左門はよく友もとめたりとて、日夜交わりて物がたりすに、赤穴も諸子百家の事おろおろかたり出て、問わきまふる心愚かならず。兵機のこゝとわりはをささしく聞えければ、ひとつとして相ともにたがふ心もなく、かつ感、かつよろこびて、終に兄弟の盟をなす。³

比較すると、二人の主人公は同じ義兄弟になったが、その過程の順序は反対であることが明らかになる。原話に范式は張劭の義気に感動し、二人はすぐ義兄弟になった。その後、毎日一緒に生活し、覚えずして半年になった。これに対して、左門と赤穴二人は当初、友人の関係だけであったが、学問を通じ、心を通わせた。二人の感情はますます深くなり、終に義兄弟の契りを結ぶまでになった。その二つの過程を比べると、「菊花の約」のほうが自然ではないだろうか。よく考えてみると、范式と張劭と二人は付き合う時間が少なかったにもかかわらず、すぐ義兄弟の契りを結んだ。一時の感激や感動に催された行為だと思われる。

「菊花の約」のほうは、前述のように、物語の背景は十五世紀の戦国の騒乱期である。義兄弟になる人は、お互いに信頼関係で契りを結んだ一方、政治や利益の一致のために契りを結んだ人も数多くいた。特に、戦国時代は戦乱が多く、下剋上の時代であった。裏切りや戦争が日常的だった戦国時代の武士にとって、信頼できるパートナーは必須である。利益で結ばれたの間にはあまり信義がなく、何時か裏切られる可能性もある。左門は赤穴を看護したが、赤穴は必ず左門に感激する気持ちを持ったが、そのような信用が薄い社会に生きている赤穴は人に疑いをもち、すぐ人と義兄弟になるということはないかもしれなかった。彼ら

は友達になり、お互いを理解した後から義兄弟になるという決定をした。原話より、義兄弟になる順序は情理を兼ね備えていると思われる。

4. 義兄弟の信義

「菊花の約」と原話は両者とも約束を守るために、自殺し、義兄弟に会いに行くという場面がある。どちらにも儒家思想の影が見られる。中国の場合はいうまでもなく、儒家思想にある「朋友有信」という規範を遵守している。それに対して、儒家思想は日本に伝来した時間が早いことから、儒教はもう生活に馴染んでいるといえる。特に江戸時代には、幕府の提唱で儒教が更に盛んになった。二作の中心思想は「信義」であることに議論はないが、どちらが真の信義であるかという「信義論争」はよく議論されている問題である。原話が再会の約束を范式本人の失念により、不可能になったのを「菊花の約」は幽閉のために果たせないという設定に変わっている。即ち、原話では本来、范式は生きて会うことが出来るが、私的なことによりその日を忘れた。逆に、「菊花の約」では約束を忘れなかったが、監禁されていたから、個人的理由ではなかった。それゆえに、日本の学者にとって、「菊花の約」の信義は原話より崇高である。その点について、中田妙葉氏は以下のように主張している。

范式の約束を忘れた態度を、信頼を欠く設定だと見えるかもしれない。(中略)処罰のために幽閉されていた宗右衛門の設定は、生きそこを出られるかも分からない身であり、約束という束縛がなかったとしても、死を選ぶほか自由の身となる道はないようである。それに対して、范式は生きて再会することが可能である身で、敢えて死を選んだ。⁴

范式は期日を忘れたというのは日常によく起

る事件である。期日を延ばすことは可能であったが、最後に自殺を選び、約束を守らなければならないという思いが、范式の信義を表現しているのではないだろうか。「菊花の約」のほうは、赤穴は約束がなくても、死を選ぶほか自由となる方法はない。中田妙葉氏はまた次のように指摘している。

原点では約束の日を忘れたという設定にし、日常の死を取り入れることで、范式の信義を強調したのだろう。それに対し、秋成は約束の期日を忘れることは人格上信頼を欠くとみて、宗右衛門を幽閉するという処置を行ったのではないだろうか。いわばこの改編部分は、期日を忘れることは信頼という意味で余り損失を見ず、結果的処理を重視する中国的な価値観と、期日を忘れるというところですでに信頼に欠けると見なす日本の価値観が、顕在化している箇所ではないか。⁵

彼らの自殺する理由は全く異なるが、原話と「菊花の約」との「信義論争」の中で、どちらのほうが「真の信義」なのかという問題には、正確な答えがないと思われる。中国と日本との国情や価値観は異なることから、優劣をつけることはできない。

「信義」は常に討論されたテーマであるが、この「信義」は「朋友有信」の精神である。作者は友人の信義を伝えたいなら、なぜ義兄弟の設定にしたか。ここには、友人の信義以外に、他の精神があるかどうか、考察してみたい。

二人の主人公は義兄弟になることが二人に関することだけではない。原話に范式が張劭に、以下のように言っていた。

范式曰：「吾幼亡父母，屈在商賈。經書雖則留心，親為妻子所累。幸賢弟有老母在堂，汝母即吾母也。來年今日，必到賢弟家中，登堂拜母，以表通家之誼。」⁶

これに対応する「菊花の約」の部分は、

「吾父母に離れまいらせていとも久し。賢弟が老母は即吾母なれば、あらたに拝みたてまつらんことを願ふ。老母あはれみて、をさなき心を肯け給はんや。」左門歎びに堪へず、「母なる者常に我孤独を憂ふ。信ある言を告げなば齢も延びなんに」と、伴ひて家に帰る。(略)赤穴拝していふ、「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。吾いま母公の慈愛をかうむり、賢弟の敬を納むる。何の望かこれに過ぐべきと」よろこびうれしみつつ、又日来をとどまりける。⁷

范式と赤穴は新しい家に属して、義兄弟の母を自分の母を見なす。その血縁がない母親にも「孝」という道徳の義務があるのではないか。そのため、義兄弟との約束だけではなく、母親との約束がある。自殺することより、約束を守るのは、「信」の実践だけではなく、母を見に行く「孝」の道徳も遵守した。

5. 殉死と復讐

原話の最後で、張劭は母親と弟に范式を弔いに行くと言い、弟に母親のことを頼み、涙を流し、家族と別れた。この時、彼はもう自刎することを決めていた。范式の柩を見た時、「兄為弟亡、豈能獨生耶？囊中已具棺槨之費、願嫂垂憐、不棄鄙賤、將劭葬于兄側、平生之大幸也。」と言い、止められても佩刀を取り、自刎して死んだ。范式と張劭との深い感情が感じられる。張劭の自刎した行為は読者を感動させたが、中国の倫理観では、母親を残して死ぬことは、たとえ信義を守っても不孝者と非難されることもある。

「桃園の誓い」で劉備・関羽・張飛の三人は「同

日に生まれることを適わないが、同日に死ぬように願う」という誓いをたてた。ここから見ると、義兄弟の関係は友情の範囲を超えて、命までも捨てられる決心があることが理解できる。中国に范謝將軍という二人の物語も同じ結末である。以下は物語の筋である。

昔、謝必安と范無救という二人がいた。彼らは仲の良い義兄弟であった。ある日、二人は橋の下で会うことを約束した。范無救が着いた時、強い雨が降ったが、彼はずっと橋の下で謝必安を待っていた。謝必安が着いた時、范無救はすでに大水で溺死していた。謝必安はこのことを知った後、自縊した。玉皇大帝は二人の信義の深いことに感動して、両人を冥界の神に封じた。⁸

これは単なる伝説だが、中国人は信義、特に義兄弟の間に命を越える「信義」を重視することがわかる。

「信義」以外にも、他の要素が見受けられる。張劭が殉死したことが、中国の「士為知己者死⁹」の精神を表す。「知己者」は自分を了解する人、また信頼する人である。自分を理解する知音はあまりあわないから、恩を返すために、死ぬまでもできる。范式のような信義がある人は珍しかった。その信義に報えるのは、死だけである。

「菊花の約」は原話から離れ、復讐譚の結末を展開した。左門は涙を拭き、家を出た。彼は母に「すぐ帰って参ります」と言ったが、丹治を殺すと、自分も殺されるはずと分かるだろう。だから、彼は復讐にいく時はもう帰ることができないという殉死の気持ちを持っていた。左門は復讐のために、赤穴を監禁した丹治を殺したが、兄弟の信義に感動した尼子は、左門を逃した。張劭と左門は二人とも死の覚悟があるが、張劭には選択肢があった。つまり、張劭は自刎という選択をしなかったら、悲劇のような結果にならなかった。これに対して、左門は復讐を決めた時はもう殺されるといふ結果が見られるが、彼が死ぬか死なないかという決定権は尼子が持っている。尼子の赦して、

左門は死から逃れた。

日本には友人や家族のため、仇を討つは昔からある。中世から武士は君主のために、復讐することもよく見られる。家の名誉、家族が殺されたため、様々な理由で敵討することも多かった。左門は赤穴の兄弟で、丹治を仇討ちすることも当然であるといえる。不義の丹治を殺すのは、正義なのである。そのため、左門は人々に殺人犯と呼ばれず、逆に信義がある人である。また、読者も彼の行動の理由を理解でき、殺された丹治を不義の人であると批判した。そして、赤穴と丹治とは従兄弟の関係で、血縁がある兄弟といえよう。しかし、従兄弟より、血縁がない義兄弟である左門のほうが信義がある。左門と丹治の行為を比較すると、主題の「信義」が一層強められる。

6. 結論

「菊花の約」は中国の「范巨卿鶏黍死生交」の改作だが、評価の高い作品である。小椋嶺一氏は以下のように評価している。

「菊花の約」は、翻案小説としての性格を濃厚に示し、その粉本である『死生交』の骨格にその大半を負っている。しかし、秋成の「菊花の約」はそういった『死生交』に存在する中国的異臭を一切取り除き、日本的風土の中に融和させる。¹⁰

上田秋成は中国の小説を改編し、日本の要素を物語に入れ、日本人の性格や社会背景に合う作品を作り、後世の作品にも大きな影響をあたえた。これは『雨月物語』の魅力ではないだろうか。

今回のテーマである義兄弟は、中日双方で見られる習俗である。同じ血縁がない人が契り、擬制家族のような関係となるが、異なる社会背景によると、義兄弟の意味も異なるところがある。「菊花の約」は中国の文学を基として、同じ「信義」が

作品の主題であるが、秋成は自分の方法で改編した後、日本の社会に合わせた。主人公の設定や、結局の違いなど色々なところから、上田秋成が「菊花の約」を書いた時の苦心が見られる。

註

¹ 《三國志・關羽傳》「先主與二人寢則同床，恩若兄弟。而稠人廣坐，侍立終日，隨先主周旋，不避艱險。」

² 明・馮夢龍(2001/12)『中國古典文學名著喻世名言』P250

³ 高田衛、稲田篤信(1985/4/30)『新註雨月物語』勉誠出版 p 21

⁴ 中田妙葉(2006)「『菊花の約』における「信義」について——中国白話小説「范巨卿鶏黍死生交」との関係による一考察——」『高崎経済大学論集』48-4 p 133

⁵ 中田妙葉(2006)「『菊花の約』における「信義」について——中国白話小説「范巨卿鶏黍死生交」との関係による一考察——」『高崎経済大学論集』48-4 p 133

⁶ 明・馮夢龍(2001/12)『中國古典文學名著 喻世名言』P250

⁷ 高田衛、稲田篤信(1985/4/30)『新註雨月物語』勉誠出版 P21-22

⁸ 王詩琅(1999/02)『台灣民間故事』玉山社出版事業股份有限公司 P114-117

⁹ 《戰國策・趙策一》:『士為知己者死，女為悅己者容，吾其報知氏之讎矣。』

¹⁰ 小椋嶺一(2002/06/03)『秋成と宣長 近世文学思考論序説』P220

テキスト

高田衛、稲田篤信(1985/4/30)『新註雨月物語』勉誠出版

参考資料

重友毅(1943/05/20)『秋成』日本評論社

重友毅(1946/11/05)『雨月物語の研究』大八洲出版株式会社

王詩琅(1999/02)『台灣民間故事』玉山社出版事業股份有限公司 P114-117

明・馮夢龍(2001/12)『中國古典文學名著 喻世名言』

鈴木敏也(2003/03/01)『秋成研究資料集成 第3巻 雨月物語新釈』株式会社クレス出版

氏家幹人(2007/02/25)『かたき討ち』中央公論新社

井上泰至(2009/05/10)『雨月物語の世界——上田秋成の怪異の正体』角川学芸出版

論文・雑誌

趙姫玉(2002)「『雨月物語』の研究——中日比較の視点から」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文

中田妙葉(2006)「『菊花の約』における「信義」について——中国白話小説「范巨卿鶏黍死生交」との関係による一考察——」『高崎経済大学論集』48-4